

## 2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

### F. その他

#### ③積極的な情報提供体制の確立

## 取組を進めるに当たり困難であった事例について

### F. その他

#### ③積極的な情報提供体制の確立

##### 《人社系》

#### ●筑波大学人文社会科学研究科文芸・言語専攻

##### 「新領域開拓のための人社系異分野融合型教育」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

積極的な情報提供体制を確立するために、ホームページを作成し、ニューズレターを定期的に発行し、また学生の公開研究発表会を開催するなどして、活動の発信に努力した。学外に対して情報の発信力は高まり、海外からの学生の問い合わせなどが多くあったが、学内(研究科内)の教員・学生に対する情報提供は必ずしも浸透したとは言えない。

(苦労したこと、困難であったことの詳細な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

情報は伝達されてはいるが、実際に教員・学生の日常は極めて多忙であり、関心があっても企画するイベントに参加する時間的余裕がないことが多い。実際に参加することによって、はじめて実感し、参加意識が高まり、重要性の認識に至る。情報の共有が少ない場合は、研究科全体の組織的な取組みではなく、一部の教員の行う特別な活動となってしまう。参加学生も、特別な活動に参加している、という意識が強かったように見受けられる。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

大学院 GP の支援を受けている間は、多くのイベントに学生を参加させることができ、また多くの学生に国際的な活動をさせるなどして教育効果を高めることができた。学生の活動はすべてホームページ上で公開し、大いに知的刺激となった。しかし学生の中にはプログラムの意図を理解せず、もっぱら資金的支援をあてにするものもあり、結果として、資金を利用した学生と利用しなかった(できなかった)学生の間に「格差」が出来てしまった。情報発信が外部に向かって成果を強調することに重点がありすぎ、研究科全体の学生に、自由で、フレンドリーなシステムであることを十分に発信する工夫に欠けていたことが、一因にあると思われる。